みて、かんじて、かんがえた南京

清水　郁子
立命館大学国際平和ミュージアム職員

2019年の年末、これからの平和創造について考える一つのきっかけを得るため、日中戦争時の日本軍の加害の地、南京を訪れました。以下では、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館（以下、記念館と表す）」「ラーベ故居」「南京利済巷慰安所旧跡陳列館（以下、慰安所陳列館と表す）」の3館を見学し、「みて、かんじて、かんがえた」ことを報告します。

南京虐殺については、日本国内で虐殺の有無、虐殺者の人数について論争があるところですが、以下では3館の展示・解説における表現、数値を元に記述します。

1．侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館

展示「前言」で展示の主旨が次のとおり紹介されています。「南京大虐殺という痛ましい史実を銘記し、無辜の犠牲者を追悼するとともに、平和に発展する道を断固として歩んでいきたいという中国人民の崇高な願望を表明し、歴史を銘記し、過去を忘れず、平和を心から愛し、未来を引き開いていこうという中国人民の確固とした立場を宣言する。」

以下では、展示パネルの記述から展示の概要を紹介します。

（1）プロローグ

展示室の入り口で目に飛び込んでくるのは壁一面の文書ファイルです。南京虐殺の死難者、生存者、加害者および第三者証人に関する約10,000巻の公文書が虐殺の証拠として納められていることを象徴しています。そして犠牲者の氏名が流れ星として天井から正面のスクリーンに映し出されます。6週間の間に300,000人の犠牲者が出たので、12秒に1人のスピードで氏名が流れ落ち、犠牲者への哀悼の意を表しています。

壁一面の文書ファイル

続く「序」の部屋には1,213枚の生存者の写真と10,000人近くの虐殺による犠牲者の名前を刻んだ「鉄の本」が、「死難者　300000」碑を取り囲んでいます。2019年12月18日時点で、記念館に登録されている生存者はわずか78名になられたとのことです。虐殺から80年以上を経て、今虐殺の真実を語れる生存者はごくわずかとなっています。

そして南京市街地を囲んでいた明代の城壁のレンガを埋めこんだ鉄の城壁が「序」の締めくくりとして設置されています。ここまでの空間で、参観者に

次に続く展示を見学するための心構えが提示されているのです。

（2）南京失陥前の情勢～南京陥落

日本は明治維新以降、国力の増強に伴い、軍国主義思想が次第に台頭し、対外侵略・拡張の道を歩み始めます。1931年の九一八事変（柳条湖事件：満州事変の始まり）により日本は中国東北部の侵略・占領、そして1937年の七七事変（盧溝橋事件）により全面的な対中侵略戦争を発動しました。1937年の八一三事変（第2次上海事変）勃発、11月12日の上海失陥後に当時の中国の首都南京にむけての侵攻が始まります。

上海から南京に向け、金山、嘉興、蘇州、湖州、無錫、常州、広徳、蕪湖、江陰、鎮江と略奪、強姦、殺人、放火の侵略が進みます。また首都南京では、8月15日の南京空襲を皮切りに、その後4カ月近く持続的な爆撃が続き、中国空軍および中国支援ソ連志願空軍の応戦もありましたが、中国は南京の制空権を喪失します。

1937年11月20日、中国国民政府は首都の重慶への移転を宣言し、これに伴い政府機関、工場、学校が次々と西遷することになります。そのような中、日本の大本営陸軍部は12月1日に南京侵攻の作戦命令を下達します。中国の南京守備軍は装備力が劣り、統制も不備な状況の中で日本軍との命がけの戦闘を繰り広げますが、12月13日南京は失陥します。

（3）南京における日本軍の暴行、性暴力

日本軍は南京占領後、国際公約に反して、捕虜の大規模な捜索・逮捕・虐殺を行い、この中で兵士以外の平民もが虐殺の被害にあいます。南京の城南の繁華街、産業地区や人口が密集する住宅街が最も深刻な被害にあいました。展示における生存者の楊品賢の証言では、次の5つのポイントで兵士か平民かを見分けていたとされています。「一つ目は禿げ頭、二つ目は手のたこ、三つ目は肩のたこ、四つ目は帽子の跡、五つ目はメリヤスのプルオーバーシャツだ。」この全てに該当しないことが平民の条件とのことですが、普通の平民にも当てはまる点も含まれているため、多くの市民が兵士と間違われて虐殺の対象になりました。日本の軍人日記（第16師団中島今朝吾や第13師団の山田梅二）でも、捕虜は皆殺しの対象であったことが綴られていました。

また日本軍は老幼、妊婦に関わらず女性の強姦を行い、極東国際軍事裁判所の判決では、日本軍の南京占領後の最初の1カ月に発生した強姦事件は城内だけで20,000件近くになったと紹介されています。性暴力については後の「慰安所陳列館」の項で紹介します。

（4）人道主義的救援

記念館の展示では史実展ということで、第三者証人の資料として、在留外国人による救援活動が紹介されています。南京失陥の前夜、南京に留まっていた国内外の人々により南京安全区国際委員会が設立され、安全区（難民区）が設けられます。この人々は南京大虐殺の期間中、難民の保護・救援に尽力し、日本軍の暴行を記録・抗議し続けました。

安全区は12月8日に正式に難民に開放され、最も多い時期には250,000人余りの難民を収容しました。この国際委員会の責任者がドイツ人のジョン・ラーベであり、安全区全体の運営に責任を持つとともに、彼自身の自宅にも500名を超える難民を収容していました。ラーベについては後の「ラーベ記念館」の項で紹介します。

実際には軍服と武器を捨てた元兵士が安全区に隠れていて、便衣兵（庶民の衣服を着た元兵士）摘発の名目で日本兵が安全区に入り込み、元兵士の摘発にとどまらず、安全区内においても略奪、殺人、強姦が行われていたのです。

南京安全区国際委員会は1938年2月18日に強制的に解散となり、その活動は日本軍とその傀儡政権が管轄する南京国際救済委員会に引き継がれます。

南京での日本軍の暴行は、南京失陥前後に国際社会の主要メディアの記者・宣教師・外交官により第三者の視点から記録、報道され、アメリカ、イギリス、ソ連、スペイン等多くの国の主要メディアで暴露されていました。

（5）戦後の調査と裁判

1945年8月15日、日本は無条件降伏を宣言し、9月2日に投降文書に調印しました。

戦後、極東国際軍事裁判所と戦犯裁判の中国軍事法廷では、ともに南京大虐殺事件に対する調査と特別審理を行い、判決を下し、法的な結論を出しました。

極東国際軍事裁判所判決書の「南京暴行」の項には次のように記されています。「日本軍に占領された最初の6週間に、南京城内とその近郊で虐殺された一般住民と捕虜の総数は20万人を超えた。」

また、南京軍事法廷の戦犯谷寿夫に対する判決書には次のように記されています。「捕虜となった我が軍民の中で、日本軍の機関銃によって集団射殺され、痕跡を残さないために焼却された者は単耀亭ら計19万余である。他に、分散した虐殺として死体が慈善機関に収集・埋葬された者は、その数は15万体余に及ぶ。殺害された総数は30万人以上に達している。」

そして、1951年に日本政府が調印した「サンフランシスコ講和条約」第11条では「日本は極東国際軍事裁判所と日本国内あるいは国外の連合国に設置された他の戦争犯罪裁判所の判決を受け入れる。」と規定されています。

このように、記念館では2つの裁判結果とサンフランシスコ講和条約で日本が調印している内容を史実として展示しています。

（6）エピローグ

最後に人類の記憶―平和へのビジョンが示されます。「南京大虐殺を人類の大きな災難として共通の記憶に残し、人々に平和への志向と堅守を喚起し、人類の運営共同体としての意識を育成し、偏見と差別を排除し、恨みと戦争をなくし、相互に尊重し、平等に向き合い、共に平和を守り発展していくことを目指す。」

展示の最後は以下の言葉で締めくくられます。

前事不忘　后事之师
铭记历史　珍爱和平
（過去の事を忘れないで、後々の戒めとする歴史を銘記し、平和を愛護す）

「紫金草」の庭園

最後に日中友好を推進する象徴である「紫金草」の庭園を見学しました。

2. ラーベ故居

ラーベ故居は1932年から1938年の間、シーメンス社駐南京代表処の代表を務めたヨハン・ラーベの居宅でした。南京失陥後は南京に設置された国際安全区の25カ所の難民収容所の1カ所として500名を超える難民が避難していた場所でもあります。

ラーベは1937年12月に日本軍の南京侵攻の直前に設置された「南京安全区国際委員会」の主席に就任し、正義と仁愛の信念の下、日本軍の暴行から中国人を保護すると同時に、世界に向けて戦争の罪悪を発信し続けました。1938年にドイツに帰国後もベルリンで南京での日本軍の暴行について講演を行っています。第二次大戦後はラーベがナチス党員であったことから不遇の生活を送り、1950年に68歳でこの世を去りました。

ラーベ故居

ヨハン・ラーベの像

（1）南京安全区国際委員会の取り組み

1937年11月に上海に設置されていた難民区における難民収容所の事例を踏まえ、南京に安全区を設置することが検討され、11月28日にラーベを主席とした南京安全区国際委員会の活動がスタートします。ラーベは委員会の設置に先立ち、ドイツ元首のヒトラーにこの取り組みへの支持を求める書簡を送っています。また、ラーベは上海の日本軍にも安全区を設置したこと、地図で安全区を提示し、攻撃をしないよう要請しました。12月1日には南京市長である馬超俊が安全区における実際の管理権を国際委員会に移譲するとともに、資金と食料の提供を行いました。

国際委員会の任務は以下の6点です。

①安全区における安全保障

②難民保護

③食料提供

④衛生施設の建設

⑤病院の設置と診療

⑥警察管理等

南京市街地の8分の1を占める安全区の全ての出入口に安全区の標識を掲げ、警官が出入りする人々の検問を行う体制がとられました。南京失陥後はこの安全区に250,000人の難民を収容しています。その中には武器を捨てた兵士や国民党軍の高級軍人も含まれていました。

（2）ドイツへ帰国後のラーベの活動

1938年1月下旬に、日本軍から安全区の難民達に対して自宅に戻るよう命令が出され、2月18日には南京安全区国際委員会は解散し、「南京救済国際委員会」へと組織が変更されます。ラーベは2月23日に南京を出発し、上海を経て4月15日にベルリンに帰国しました。

ベルリンでは、シーメンス社、ドイツ外交政策局、極東協会国際部等での講演会やアメリカのマギー牧師が撮影したフィルムの上映会を通じて、日本軍が南京で犯した暴行について報告を行いました。ドイツ政府やヒトラーに向けては文書と写真で報告書を提出しています。

しかし1938年6月にラーベは秘密警察に逮捕され、シーメンスの働きかけで釈放されたものの、講演、執筆等の活動は全て禁止されます。1945年7月からのポツダム会談後にドイツで非軍事化、非ナチ化の政策が進められ、南京でドイツ語学校設置の際にドイツからの資金獲得のためにナチ党に入党し、党の責任者も務めたラーベの非ナチスの手続きが終了したのは1946年6月のことでした。経済的に困窮していたラーベの元に南京市参議会によるラーベ救済募金活動が行われ、2,000米ドルの募金がラー

南京利済巷慰安所旧跡陳列館

陳列館外壁

べに届けられました。

1950年1月5日、ラーベはシーメンス社の事務室で倒れ、自宅に運ばれますが、その日のうちに亡くなりました。遺体はベルリンに埋葬されています。

1階展示室の結語としてラーベの言葉が紹介されています。

可以宽恕、但不可以忘却。

（許してもいい、しかし忘れてはいけない）

3. 南京利済巷慰安所旧跡陳列館

慰安所陳列館は、南京失陥後に日本軍によって慰安婦施設とされた「東雲慰安所」と「故郷楼慰安所」の旧跡を記念館として整備し、2015年12月に開館した陳列館で、アジアで最大規模の慰安婦資料館であると言われています。慰安所陳列館は8つの建物から成っており、6つの建物が公開されています。

（1）A棟（利済巷2号／東雲慰安所）基礎陳列

東雲慰安所は1階に14室、2階に16室の合計30室があり、主に朝鮮籍慰安婦が日本軍の性奴隷とされた場所です。それぞれの部屋を展示室とし、当時の部屋を再現した部屋、アジア各地の慰安婦の歴史や制度を紹介する部屋、個々の慰安婦の悲惨な被害の実態を紹介する部屋と多様な展示をみることができます。

（2）B棟　旧跡陳列

この建物では日本軍による慰安所の歴史、概要が紹介されています。入り口を入ってすぐのところにある次のメッセージが心に残っています。（日本語は筆者訳）

泪滴一条路
“慰安妇”们痛苦的泪水
曾经吧嗒吧嗒地
滴落在慰安所内每一条
路上至今依稀可见
印证了她们的无法
挣脱“牢笼”束缚的无助与悲伤

涙が一筋の道となり
「慰安婦」たちの苦痛の涙が、
とめどなくバタバタと流れ落ち、
慰安所内に一筋の流れとなり、
現在にいたっても見ることができます。
彼女達の「おり」の束縛という不安と悲歎から
逃れるすべのない確たる証拠です。

この建物では、南京の日本軍慰安所と慰安婦の生活についても紹介されています。

慰安所には日本軍が設置したものと民間業者が設置したものの2種類があり、1937年12月22日に南京の傅厚崗慰安所が日本軍により正式に設置された最初の慰安所であると紹介されています。南京には40カ所以上の慰安所が設置されており、松下富

貴楼慰安所、鼓楼飯店日本軍慰安所、花月楼日本軍慰安所、東雲慰安所等があり、写真と実物資料で慰安所内での生活が紹介されています。

東雲慰安所の19号は、慰安所陳列館中庭にある妊婦の像のモデルでもある朴永心（パク　ヨンシム）が住んでいた部屋です。

（3）C棟群4棟（利済巷18号／故郷楼慰安所）特別展

これらの建物は1棟毎が独立した住居のような造りで、日本国籍の慰安婦が住んでおり、主に日本の高級将校を相手に慰安婦生活を強制されていたところです。訪問時には以下の4テーマの特別展が実施されていました。

①上海慰安所と日本軍慰安婦制度の犯罪証拠展覧会
②中国慰安婦の凄惨な記憶展覧会
③朝鮮半島の日本軍慰安婦被害史実展
④太平洋戦争と日本軍慰安婦制度の犯罪展覧会

4．みて、かんじて、かんがえた南京

記念館を訪れたのは2度目です。前回の訪問は2014年8月でした。その時の印象は日本軍による破壊と虐殺の被害の実態が写真、証言、新聞記事、模型、映像等によりリアルに示され、戦後の日中友好と平和創造への決意が協調されていたというものでした。今回は2017年にリニューアルされた展示を見学しました。リニューアルにより展示の手法が大きく変わっており、被害者への鎮魂とともに、史実の重視（入口に提示されている展示テーマがまさに「南京大虐殺の史実展」でした。）、中でも被害者・加害者・第三者からの証言が数々の実物資料とともに展示され、南京虐殺から80年以上を経て「記憶の継承」が重要になっていると強く感じました。また、被害者の方々の悲しみ、その中で無私の努力で被害者により添った国際委員会の人々の献身、そして事実を記憶に留め平和創造のために足を踏み出すことの大切さ、恨みではなく友好を積み重ねることの大切さを感じました。また記念館そのものが当時の犠牲者のお墓、弔いの場所でもあるというメッセージも印象的です。

ラーベ故居は見落としてしまいそうな場所にひっそりと建ち、ここに600名もの人々が避難していたのかと当時の悲惨さを改めて感じる場所でした。普通の一外国人が、再三の退去勧告にもかかわらず南京に留まり、中国の人々の命を守るために命をかけて活動していた事実、ドイツ帰国後はナチ党員であったことから不遇の生涯を送ることになったものの中国の人々の温かな支援が寄せられていたことに、国際的な友好活動について改めて考えさせられました。

慰安所陳列館は記念館の別館という位置づけがあり、前日にWebから見学申し込みをして出かけました。こちらは館内写真撮影禁止、日本語の解説も少なかったのですが、かつての慰安所そのものを改築・復元した陳列館ということもあり、慰安婦達の悲しみが迫ってくる場所でした。アジア最大の慰安婦博物館とのことで、幾棟にもわたる展示室に圧倒されました。苦痛の涙がバタバタと流れ落ちている彫像からは今も慰安婦たちの苦しみが伝わってきます。

記念館にある「歴史を記憶すべきであり、憎しみを記憶してはならない」という李秀英さんの言葉は非常に印象的であり、平和を希求する一人一人がどう行動していくのかを考える時に重要であると思います。一人でも多くの人々が国境を越えて連帯し、主体的な努力を積み重ねていくことが重要なのだと思います。

記念館見学の際には、スタッフの芦鵬さんに丁寧にご案内いただき、充実した見学をすることができました。お忙しい中、ご案内いただいた芦さんに感謝の意を表します。

【参考文献】

笠原十九司『日中戦争全史（上）』2017年、株式会社高文研。
笠原十九司『南京事件』1997年、岩波新書。
北村稔『「南京事件」の探求』2001年、文春新書。
秦郁彦『南京事件増補版』1986年、中公新書。
ジョン・ラーベ『南京の真実』2000年、講談社文庫。